

『18世紀 イギリスの染織』

図書館司書二課 佐野 かおり

ここで紹介するコレクションは、34×26×10cmの紺色のケースに金文字で“English printed textiles of the eighteenth century”〈K753.233-E〉とタイトルが書かれ、中には1770-1800年頃のイギリスのCalico cotton（キャリコ・コットン＝捺染綿布）が透明フィルムの袋の中に1片（多いもので3片）ずつ入っている形態の資料集である。

本コレクションの染織布55点のうち3点が、“The Victoria & Albert Museum's textile collection: design for printed textiles in England from 1750 to 1850”〈753.833-H〉および、全3巻のシリーズで刊行された『イギリスの染織』（佐野敬彦編）〈753.233-I-1～3〉等で確認できる。

本コレクションについて、売立目録によれば、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館（以下、V&A美術館と略す）染織コレクション担当学芸員はこれらの見本のすべてが18世紀の正真正銘のものであることを疑わなかったし、ほとんどが稀少であるとの意見だった、と記されている。

更紗木綿に捺染されたデザインは動物、鳥類、中国風景、古典的・歴史的風景、装飾縁文様、花、昆虫そしてシェイクスピアの登場人物等である。デザインはすべて、ほぼ、1770年から1800年までの年代であり、銅版、ローラー、木版等様々な方法で捺染され、カーテン、ドレス、家具用布、壁掛け用布等に使用された。

イギリス政府は1851年、ハイドパークで開催された世界工業製品大博覧会（万国博）に出品された美術・工芸品のうち優れたものを選んで買い上げた。それらは1852年にヴィクトリア女王の後援を得て、マルボロー・ハウスで公開した。その際、1837年イギリス各地に設立されたデザイン学校の収集品も展示されている。当時の手工業製

品美術館の収蔵品は、V&A美術館の今日のコレクションの発端である。

ヨーロッパにおける綿織物の歴史を概観しておきたい。もともとヨーロッパに木綿は自生せず、綿と綿花栽培がヨーロッパに入ってきたと推測されるのは、9世紀以後であった。綿花栽培は地中海の島々や北アフリカに広がり、13世紀にはイタリア商人によって大量の綿がヨーロッパに運ばれてきたが、当時ヨーロッパでは綿は主として蠟燭の芯や衣服の詰めわたとして使われていた。多彩な色を使い手描きした綿布やインド綿布がヨーロッパにもたらされたのは、17世紀初頭に設立された東インド会社によってであった。



図1 「鹿と犬(部分)」

1750年以前のほとんどのイギリスの捺染布は、年代を確認することができない。「東インドの捺染・定着の唯一の正確な方法」というウィリアム・シャーウィン（William Sherwin）の1676年の特許以前は、様々な布への捺染は普通の印刷用インクが顔料を用いていた。シャーウィンは、恐らく、^{みょうばん}明礬や鉄を使った金属酸化物で捺染するのに必要な濃化剤や、ピンク、赤、紫、黄、茶、黒の色合いを出すための媒染を発見した、と推論されている。18世紀初頭のイギリスの製造業者たちは、染料の媒染方法の発見に努力していた。1730年代になると、すでに捺染されたデザインの狭い部分に刷毛で染料をさすペンシリング（手挿し）という方法が行われた。1742年には、このコレクションの見本の多くに見られるように、「チャイナ・ブルー（中国藍）」と呼ばれる美しい色の褪せない青色が発明された。綿布に施されたこれらの色の捺染は、絹織物の美しさや複雑さと競い始めたのだった。1750年には、捺染布が美術品として扱われるようになっていた。



図2「花文縞」

V & A美術館染織コレクションにみられる本コレクションの1片が、図1「銅版捺染の室内装飾用布」（1761年）で、17～18世紀に刊行された版画集からの田園風景や廃墟の図版に、動物と鳥を加えて合成したデザインの動物（鹿と犬）の部分である。木綿に2枚の銅版による捺染である。

図2は「室内装飾用の更紗」（1790-95年頃）で、様式的、写実的な花文縞がデザインされている。木綿に木版捺染と青色の手挿しがなされ、織り耳にはブルー・スレッド（青糸）が織り込まれていた。ブルー・スレッドとは、イギリス製木綿布を課税の対象品として識別するための3本の青い経糸で、法令により1774年に規定され、1811年に廃止された。

図3は「カーテン（散らし文様）」（1804-10年頃）で、黄地に赤と黒で捺染され、ポンペイ様式の色彩の縁文様がデザインされたカーテン地の部分図である。ここでも、木綿に木版捺染がなされ、ブルー・スレッドが織り込まれている。



図3「散らし文様（部分）」